

【発表】

渡辺憲司「津軽家大名サロンと文芸：山鹿素行との関連を中心に」

今までも加賀さんの御発表だとか、私も山鹿素行年譜の抜粋のようなものを出しまして、山鹿素行を中心に、津軽家大名サロンをめぐる人々というのが大きな話題になりました。最終的に私の興味はどうして芝居に興味を持っているのかというところなのですが、そのことを含めて、今日は津軽信政の学問の傾向といったものについて、少しお話をしたいと思っております。

昭和九年に森林助氏が素行の二百五十年忌に際して出された『山鹿素行と津軽信政』という丁寧な本があります。おそらく素行と信政の関係を語るには一番詳しく出ている本なのではないかと思えます。ここでは山鹿素行と津軽家というのは非常に親密な関係であると述べていて、両方から尊敬していた、つまり津軽家は山鹿素行のことを尊敬していたし、素行も津軽家に対して貢献をしたと書いてあります。どうもこういう資料というのはお互いに褒め合っているものですから、もう少し津軽家側からというだけではない見方で、素行との位置関係を見ても必要があるのではないかと思います。

津軽家と山鹿家の関係については、『山鹿素行と津軽信政』で言い尽くされていますが、一応まず、「配所残筆」において津軽家がどのように扱われているかという点を見てみたいと思います。「配所残筆」というのは、素行の著した「聖教要録」という書物が保科正之の政治方針と異なっていたことから咎められ、浅野家に配流されたのですが、その時のことを中心に素行が延宝三年に書いた遺言

状です。自分は配所で死んでしまふかもしれないと思ったことから、それまでの思いなども含めて、寛文六年の事件を中心に延宝三年に書いたわけです。つまり配所の赤穂における遺筆というような意味です。

素行は「配所残筆」に自分の辿ってきた道を記し、どういう人間関係であったかということを書いています。そして、それを息子に残して行つたわけです。素行の経歴を知る上で最も基本的な書物です。これを少し見てみたいと思います。コピー1-1の三二七頁の矢印を付けたところを御覧下さい。このように「配所残筆」はその人それぞれの家のことについて書いてあります。右側に「松浦肥州公御事は」とあるところは松浦鎮信について書いているということになります。

次の項目が津軽家について書いてあるところです。「津軽十郎左右衛門殿御申候は」とあるのは、津軽信英のことです。「津軽越中守殿」というのが信英の甥にあたる藩主信政です。津軽家は知行高は少ないけれども土地は広くて新田が多いので知行は望みに任せると言われたと書いてあります。「配所残筆」には、素行がどれぐらい他の大名たちから仕官を求められたけれども行かなかったということを書いてあるのですね。千石をあてられたけれども行かなかったとか、そういうことを言っています。ここでも、知行は望みに任すので津軽越中守が初めて入部する時には一緒に来いと言われたと書いています。しかし素行は、ありがたい話であるし、信政からは非常に目をかけられたけれども、「いまだ御若年に被_レ成_二御座_一候、尤十郎左衛門殿出雲守殿被_レ仰候御事に御座候へ共、家中之衆又は他所衆承候て、御若年之御方様へいか様に申なし候て、如_レ斯儀御座候など」云々と言います。どういふことかと言いますと、信政

は非常に若い時に家督を継いでいるのですが、素行との最初の会見が万治三年で、信政は十五歳でした。信政の後見人である叔父の信英が間に入って、素行と信政を取り持っているようです。信英についてまとまった資料がないかと思つて探したのですが、よくわからなくて、コピー2の『津輕黒石藩史』の中に、正徳二年の五十年忌に際して人見行光の撰文があつて、これがどうも信英に関しては基本的な資料のようです。まず藤原家の子孫だと言つていて、これは津輕家のパターンです。そして、武州江戸に生まれて、幼い時から学問を講じ、兵法は生田十太夫、山鹿甚五左衛門についたとあります。劍術は一刀流、文学は洛陽では清水執行についたようです。この人は文学関係で出て来る人かもしれません。徒然の講釈か何かだったかと思ひます。ちよつと注目すべき人です。後は小見山玄益、これは儒者で結構知られた人です。それから中院通村に和歌を習つたとあります。黒石藩の初代の藩主になるこの信英が、素行と信政の間に入っているわけですね。

山鹿素行は一旦、浅野家に仕えています。それを一回やめて、後で配流された時に元の主君である浅野家に預けられることになりました。万治三年に津輕信政に初めて会うわけですが、この年は浅野家を辞めた年なんですね。このあたりのことについては、私が二十代に書いた「山鹿素行と浅野家致仕」という論文があつて、なぜ素行が浅野家を辞めたのかということについて書いています。浅野家を辞めて、素行は浪人するのですが、次の仕官の第一候補は津輕家だったのではないかという推測は成り立ちます。そういう点では、津輕家がどれぐらいのお金を出すかというのは、素行にとって大きな問題だったと思います。素行はこれを結局断つています。信政が若輩だからだと言つています。これはおそらく詭弁です。信政は若い

と言つてもこの頃には二十ぐらいになつていたので、むしろなぜ津輕家に行かなかつたかということが問題になると思います。いろいろ推測するしかないのですが、この時点では津輕家はまだまだ素行にとつては役不足というか、やや軽視していたのではないかと思われるわけです。信政の治世は非常に長いのですが、まだこの時の津輕家は混乱期にあつて、藩政が確立していなかつたようです。

それから、コピー1に戻つていただいて、素行が付き合つていた他の大名たちと比べてみますと、代表的な人は松浦鎮信ですが、この人に関しては「拙者心底被_レ為_レ成_二御存_一候御事は、因州公より猶以厚被_レ成_二御座_一候」というように、自分の心中を理解してくれているのは松浦だと言つてゐるわけです。

さらに因州公、これは浅野長直ですが、この人については「御老年と申、御学問之義唯今之御大名には無_レ之候」と言つていて、今の大名でこれ以上の学問の人はいないということです。他の人たちのことも比べて見てみますと、どうも津輕家に対しては冷たいのではないかという印象を持ちます。ただ、ずっと後まで津輕家との関係は続くわけですから、いろいろ変わつていったのかもしれませんが。

私は「配所残筆」も「山鹿素行年譜」もおもしろいものだと思つてゐるのですが、たとえば、レジュメに「配所残筆」(コピー1-2)と山鹿素行年譜の当該記事(コピー3)との比較、年譜の日記ドキュメントとしてのおもしろさ。芸能記事の再評価につながるか?と書いたのですが、これをちよつと話題にしたいと思ひます。コピー1-2の左側の矢印を付けたところを見て下さい。これはどういう状況かと言ひますと、素行は有名な兵法家、北条流の氏長の弟子になるのですが、寛文六年に保科から指示があつて、北条氏長が素行を捕らえに来るわけです。その時点で保科は素行を怪しんで、

なぜ怪しいと思ったかは諸説あるのですが、思想的にいうと「聖教要録」という書物が幕府を馬鹿にしているとか、背後には林家とか朱子学系のことを徹底して批判したことがあるとか言われています。もう一つは、由比正雪の乱とかがあった頃で、浪人者を抱えるということが警戒されたということがあります。素行の元にはたくさん浪人が集まっていたらしいのです。そうした素行の影響力を保科が恐れて、罪に処したのではないかと考えられています。その時に、素行の先生である北条氏長を表に立てて、捕らえに行かせるわけですが、この後、江戸所払いになって浅野家に流されます。そういう状況です。

三二八頁の最後から見て行きます。「夕料理不_レ被_レ下候故、食事心能認候て、行水仕、定て唯事には有_レ之間敷と被_レ存、乍_レ立遺書相認殘置候」。もう出かけるので遺書を書いていきます。「尤若死罪に被_二仰付_一候はゞ公儀へ壹通指上可_二相果_一、是又相認令_二懷中_一候。此外五六ヶ所へ小翰相調、与態老母方へ不_二申遣_一、つまり素行は切腹を覚悟しているのですね。そして、わざと老母には何も知らせませんでした。そして、「宗三寺へ参詣仕、下人成程省き若党兩人召連、馬上にて房州へ参候」と、北条安房守氏長のところに召し出されているので行こうとします。

その次のところで、当日の話なのですが、「四日には津輕公へ可_レ被_二召寄_一兼約御座候つるを、津輕公門前にて存出し、明日参上仕間敷候由、使をよせ、北条殿へ参候」。途中、津輕公の門前で、そういうば明日約束をしていたなということを思い出して、行けなくなりましてということをするのですね。そして、北条殿へ行くと、「門前に人馬多相みへ候。唯今何方へぞ打立候様子に御座候。此体、拙者若不_レ参候はゞ、則拙宅へ押寄御ふみつぶし可_レ有_レ之様子と見

へ申候」というように、自分の方から行かなかつたら押し寄せられるところだったという危機感を書いています。どうも、このあたりを見ると、先程お話ししましたように、素行は津輕家を軽視していたのではないかということが感じ取れます。約束を忘れていたということですね。

この記事と合わせて見ていただきたいのが、コピー3の素行年譜の項目です。寛文六年十月三日、「北条氏長切紙を以て予を招く。乃ち盟漱して神主を拝、旧識に及び遺書を書く。晩炊を食し、妻子に觴して云はく、事皆命あり、患ふべからず。此の如き節に丈夫の妻子は其の志を見はすべし。予は母君を見んと欲すれども、母君必ず悲歎せん。故に謁せず。且つ明日津輕氏に会するの約あり、供人行いて之れを告ぐべしと。乃ち衣服を新にし礼容を整へ、供輩を省きて彼の地に至る」とあります。この箇所と「配所殘筆」の記述は一致していることが確認できます。そして、氏長が公命を伝えて、赤穂へ行け、お前のことは浅野の太守が預かってくれるからということを書いて、四日五日六日七日八日と浅野家に預けられて、九日に赤穂へ送られます。

こういうふうに一致しているところを見ていくと、素行年譜というのはかなり断片的なところがあつて信用できないのではないかと言われているけれども、結構信憑性があるのではないかと思います。ですから、前回の発表で年譜の中に歌舞伎の記事とかが出て来るとお話ししましたが、それらはもう少し使ってもよいかなと思います。

少し話を戻しますが、素行が赤穂に流された原因は、一つには浪人をかき集めていたということにあって、石高でも三千石を超えただろうと言われています。素行はたくさんさんのものをもらうんです。

ね。お礼やお米とか、そういう記事が結構あつて、儒者で有名になるとかなり金持ちになるようなのです。

それから、素行のまわりには不平分子というような大名が集まるということも言えます。私が以前取り上げたのは松平定綱ですが、それも当時の政權からずれています。たとえば、この頃、明が滅亡するのですが、その際に日本に援軍を頼むのです。徳川政權はそれに介入して出兵するかどうかの岐路に立って、止めるわけです。これはあまり注目されていませんが、日本の行方を大きく左右した問題ですね。徳川政權は最終的に出兵をしないという決断をしたのですが、その時、紀伊なんかは出兵すべきだという主張をして、幕府内が対立して揺らぎます。出兵すべきだと言った人たちの方が声が大きくて、出兵すべきではないと言った人たちが幕府内で軽視されるということになります。つまり自分たちの意見が通った方が軽視されるというおもしろい状況になるわけです。出兵するなどと主張した一つの背景にあるのは、山鹿素行のグループなのです。そういうように、いろいろな不平を持っているような、幕府から見ると嫌なグループが素行のまわりに集まっていた。その中に津輕信英もいたわけです。その頃の津輕家も非常に揉めていたのです。先代藩主信義が淫乱な人で、満天姫事件などもあつたり、家督争いもあつて混乱期でした。

素行のこうした関係と対立していたのが保科正之です。年譜の九四頁にも出ています。「今年聖教要録世に流布し、人以て誹謗を為す。且つ保科肥後太守切りに之れを怒ると」というように書いていて、時の実権者である保科が怒っているわけです。保科の先生役をしているのが吉川惟足です。吉川神道の人なのですが、これがとにかく素行を目の敵にします。吉川の方は朱子学を大事にしているの

ですが、素行は朱子学を徹底して嫌います。素行と吉川が対立しているということも重要です。

その後も、素行は津輕家とずっとつながっては行きます。特に「中朝事実」というのを寛文九年に出版しています。日本こそアジアの中心で中華だということを書いています。コピー1-3の「配所殘筆」を御参照下さい。「中朝事実」の内容を説明している箇所です。「天神の皇統竟に違はず。その間弑逆の乱は指を屈してこれを数ふべからず。況や外朝の賊、竟に吾が辺境を窺ふことを得ざるをや」と言っています。日本主義的傾向を明らかにした、いわゆる皇国史観に基づいているものなのですが、辺境の地である津輕にとってはそういう思想は重要なわけです。こういう思想的なところでは、山鹿素行とずっと繋がって行きます。しかし、一方で山鹿素行とだんだん離れて行っているところもあります。そして、素行の死後は津輕信政はスタンスを変えていると思います。吉川惟足に接近して行きます。山鹿から吉川へ移っていくわけです。

メモの④にまとめました。基本的に皇国史観を強く有する山鹿兵学と吉川神学とは、共通の思想基盤を有するものであるが、信政は山鹿兵学から吉川神道へと、スタンスを変えていった。山鹿家と津輕家の関係は依然として継続されているが、素行の死後、信政は急速に惟足との関係を深めている。それは、幕藩体制側への明確な接近姿勢を示すとともに、一門の勢力関係の移行をも反映している。信英庇護のもとに成立した信政政權の自立過程でもあつたといえるであろう。一応、このようにまとめてみました。

信政はいい歌を作っていると思うのですが、誰が和歌の先生だったのか出て来ないようです。よく中院と言ったりするのですが、出て来ません。津輕家は近衛家との繋がりを権威付けにするので

すが、和歌に関してはよくわかりません。

福井久蔵『諸大名の學術と文芸の研究』を参考にしてお話ししますが、神道で有名なのは水戸光圀、保科正之、徳川義直、それから、黒羽藩の大関増業、そして津輕信政らしいです。信政は吉川惟足を尊信、寛文十一年にその門に入り、切紙伝授目録というように、いろいろな免許を出されています。その記録と加賀さんの出されていた津輕家での芝居興行記録を合わせてみると、当然のことながら、免許を受けた日は芝居はやっていません。たとえば元禄十三年は信政は五十五歳ですが、六回も免許皆伝の日があるのです。この時には神道の講義をします。三月十一日に芝居が終わって、そして九月二十一日に帰国します。その間の、三月十三日、七月二十日、八月八日、八月十日、八月二十八日に免許を受けています。左手に芝居、右手に神道というような印象を受けます。

神道を好むような人は、大体においては芝居は好きではないようなのです。茶道なども忌避するぐらいです。つまり簡単に言うると、神道と芝居とは対極にあるように思われます。信政という人からは芝居が好きという感じは窺えないような気がします。とにかく吉川神道に入って、宝永七年まで六十三座、元禄四年には十四座にも及び、ついには三事重位まで行ったらしいです。これは道の全伝で、信政は相当偉い神道の権威者になっていると言えます。こういったことは、ただ学問が好きだったというだけでは解釈できないものがあると思います。なぜ、これほどまでに神道に肩入れするのかというところがもちろん問題になります。

政治的戦略ではなかったかと思われる節があります。たとえば、津輕家には満天姫事件というのがありました。二枚目のプリントにインターネットから印刷してきた説明を載せておきました。満天姫

は松平因幡守康元の娘で、家康の養女となって福島正之に嫁ぎます。ところが正之が慶長十二年に乱行の咎によって父正則から罰せられると、身籠もつていたのに実家に返されてしまいます。この年十二月五日に津輕為信が死去して三男信枚が家督を継ぐのですが、家康はこれに満天姫を再婚させます。ところが、信枚には辰子という愛妾がいて、これは石田三成の娘でした。満天姫は先夫の子を出産して大道寺家に養子に出します。満天姫と信枚の間には子供は産まれません。寛永八年に信枚が死去した後、津輕家を相続したのは、辰子が産んだ信義でした。これが乱行の人でありました。満天姫の息子直秀は出生の秘密を知り、福島家の再興を夢見ますが、満天姫はそれが津輕家に累を及ぼすことを恐れ、毒殺します。こういう混乱が背景があつたわけです。

さらに先代信義の淫行、酒乱などで権威が失墜していたこともあり、信政はその回復に努め、また津輕家の権威付けも考えたろうと思います。また、両国の北辺国境に関して、寛文九年にシヤクシャインの乱というのがあります。乱とは言いますが、圧政に耐えかねたアイヌの自主権確立の運動であつたわけですが、それに津輕藩から五百人の派兵をしています。津輕が「外ヶ浜」と言われるような辺境の地であつたということは確かに言えると思います。東の果てという感覚があつたと思われる。そうした辺境意識にとつて神道における日本中心主義は重要であつたと考えられます。こうしたことを通して、信政の政権は確立していったのではないかと思います。信政は野元道玄を招いています。道玄は環境保全に力のあつた人で、津輕でも植林などをするのですが、ただ近世初期は全国的に植林が盛んであつた時期なので、あまり過大評価はできないかもしれません。ただし、野元道玄は木下長嘯子の息子なので、文芸的なつ

ながりという点でも注目できるかもしれませんが。しかし、信政に関しては、文芸への関心がなかなか窺えない人物で、軟派ではなく、硬派に近かったと思われます。ですから、津輕藩邸での数多くの芝居興行は大名の個人的な趣味性ではなく、むしろ、母とか夫人等を含む「奥」に連なる一門の結束を強める政治的戦略としてとらえられるのではないだろうかと思っています。

当時の夫人の像というものをもう少し描かないといけません、夫人の位置というのは強くて、政治にも関与していた女性像があった可能性もあります。天和三年の芝居の際には土井能登守が筆頭客ですが、この利房は老中で幕閣の中心人物ですよ。そして信政の姉万を室としています。彼は信英が信政の後見となる際にも誓約書を出す相手になっていますし、津輕家にとって非常に重視された人物であつたと言えます。他に増山正弥なども呼ばれています、政治的に重要な関係の結束を芝居という座で強めようとしたと考えられると思います。そして、それは結果として地域文化の興隆にもつながったようです。津輕の茂森町という所に芝居小屋があるそうですね。元禄四年から常芝居が始まったそうです。ちょうどこの時期ですね。

【デイスカッション】

武井：津輕家の芝居見物が、もともと親戚中心であつたということはそのなのだと思いますね。能登殿奥様は芝居関係の記事と深く関連してきます。印象としては彼女が非常に重視されていて、万姫が来たら芝居をやらなくてはいけないという感じですね。それは能登守が津輕家の親戚の中で芯になっていたまとめ役であり、

さらに津輕家と幕府とを結びつけている人物であつたからでしょうね。

加賀：土井家との姻戚は誰かが仲介したのでしょうか。津輕家と格が釣り合わないような気がします。

渡辺：ただ土井は石高としてはそれほど大きな家ではありません。役割は重要だけれども石高は低い家と、津輕家のように石高が高くて財政は豊かという家があつたのだと思います。役割と財政との結び付きですね。増山だって石高は低いですよ。家網の側室の縁で出世した家ですよ。

加賀：信政は芸能への関心がなかったのではないかという話がおもしろかったです。

渡辺：なんとなく趣味大名というのは違ったような気がします。

武井：我々は最初松平大和守という人を知っていたから、あれは芝居が好き人だから芝居ばかり見ていたのだという印象だったのが、最近、芝居が特に好きでなくても見るのが一つの生活習慣というか、いろいろな事情があつて芝居をやるのだということが出て来ますね。鳥取の場合はお母さんが好きだったんですよ。鈴木くんが見つけている資料なんかではどうですか。特に芝居好きというのがありますか。

鈴木：岡山藩池田家は、武井先生が書かれていましたように、綱政

が『土芥冠鑑記』にも歌舞伎が好きだった大名として出ていて、綱政が好きだったから盛んに上演しているという印象です。でも、加賀藩前田家の方は、やっぱり將軍の養女がお嫁に来たから、その人のために芝居を催さなくてはとか、嫁いだ娘のためにとか、そういう奥向きの感じでしているようです。

林：紀州も鶴姫のためだとは思えないところがありますね。しょっちゅうやっているのは中屋敷で、当主は見えていない場合もあったようです。特に芝居を藩主が個人的な興味で見ているという感じはしなかったですね。

加賀：親戚一門の結束を強めるというのは、津輕家でも初期は感じられて、能登殿奥様とかが好きだったから芝居をやっているようだったのですが、元禄後期になると、家中を並べて上演しているというふうになってきますね。政治的な関係のお客もなく、家中で催して家臣に見せているという感じです。

渡辺：家中で芝居を好むという傾向が出てくるとおもしろいと思いますね。

加賀：後一つ気が付いたのは、ちょうどその頃に家来たちが代替わりするんですね。そういう人が江戸に出て来ると芝居興行も増えるというような印象がありました。

林：延宝年間までは浄瑠璃や放下ですが、江戸城でもやっているわけですが、あれ以前と以降とではやっぱり違うのではないかと思

います。歌舞伎では元禄初年に非常に厳しい法度が行われていますし、家臣たちが見るのは元禄後期ですよ。その頃にはあまり公然と老中とかを招いて上演するようなものではなくてきているのではないかと思います。交際の中で行われる芸能としての意味合いは、かなりの速度で変わっていったと見ないといけないのかもしれない。

加賀：能はどうだったのでしょうか。

武井：能の場合は、観客に女性というのは突出しては出てきませんよね。

林：表向きのものでしょうね。

加賀：歌舞伎や浄瑠璃の方が一家の結束のためという感じだったのでしょうか。

渡辺：よくわかりませんが、女性の見物客が多いということを、単に女性が芝居を好きだったからというだけではない問題として考えられないかなと思ったわけです。いかに女性が政治に関与していたかなども一方で考えられるかという発想がありました。

加賀：信政は芝居上演に関して、結構熱心に口出しをしていますよね。確かに芸能が好きという感じではないのですが。

渡辺：いい歌を詠みますし、感性が豊かな人だったのではないかと

思いますね。

武井：信政が個人的に芝居好きだったという印象は日記を読んで感じたことはないですね。

林：これが公務日記だからということもあるのかもしれませんが。大和守は自分の日記だから、やっぱりよく出てきますね。

加賀：殿様から何か下さるという場合、必ずしも全員の芸能人には与えていませんよね。

武井：あれはどういうやり方をしているのか掴めないでしょう。全員の分と主立った人への分というのがあって、何か書き方が分かっていたような気がします。主立った人に渡したということは、それは個人に与えているのか、後で分配しろということなのか掴めないですね。

林：延宝八年三月二十五日に十一日の分と十六日の分のギヤラを払っているのは、誰にいくらということが全部出ていますね。こういうふうに書いてあるということは、少なくともこういう計算で、誰にいくらで合計いくらかというように出しているということですね。ギヤラの交渉も直接やっているのか、仲介がやっているのかとか、この人にいくらかと一々計算していた時と、一座で合わせていくらかという時とか、いろいろあったのでしょう。鳥取藩の記録でも主立った三人ぐらいは銀二枚とか書いてあるけれども、それ以下の人はわからなかったりしますよね。一座のメンバーが固定

しているとも限りませんし、個人的にこの人にはいくらという計算をしていた可能性もあったと思います。

加賀：金額と人数とか、人名とかに関して記述に齟齬がかなりあったように思います。

林：こういう日記の書き方は、あったことをちゃんと書いていくというのではなくて、こういうふうにするという予定の紙を基に書いていたのではないかと思います。だから、矛盾したことも平気で書いてあったりしますよね。

武井：『済美録』は結構計算が合うんですね。合計いくら渡して、これ以下の人はいくらでということも書いてあって、それを計算してみると合うんですよ。意外ときちんと計算しているのだと思います。たぶん、きっちり計算して渡すギヤラと、それからご褒美というのが二重にあったんでしょうね。

渡辺：芝居の経費は藩のお金からきちんとした形で出るのかな。

加賀：やはり勘定方が計算して出していると思います。

渡辺：津軽家に呼ばれている役者は専任みたいな形なのですか。

林：違うと思います。津軽家に出てくる役者たちは大体他の日記にも出てきますね。たとえばこの時期に来ていて、御歳暮とかも持って来ていて、津軽家と関係が深いのだなと思われるグループも

あるのですが、そのグループのメンバーもいつも一緒なわけではないようです。

渡辺：能なんかはかなり固定していませんか。

林：能の場合は、一つには抱えられているというのがありますよね。歌舞伎の方はやっぱり非合法だし、そう公然とした関係にはならないと思います。

武井：でも、能よりは緩やかだけれども、やっぱり大名と関係の深い役者というのにも出て来てるよね。鈴木くんが調べたような、参勤交代の時は迎えに行くとか、そういう関係は見えるね。

加賀：それは役者にとっては一種の営業みたいな感じでしょよね。

渡辺：浄瑠璃語りは抱えですか。

鈴木：永閑が南部まで行ったということなどは知られていますが、抱えというのとは違うように思います。

武井：歌舞伎役者は抱えられる場合は、男色専門で行くということでしょうかね。

加賀：元禄後期になってくると、誰が芯の役者なのかがわからない一座とかが出て来るようです。

林：まだあまり資料がなくてわかっていないということも言えると思います。延宝頃の九右衛門とかだったら、九右衛門が芯だなどわかりませんが、それでもその時の座のスターが誰だったのかなど、よくわからない部分もあります。どういう経緯で呼ばれているのかもよくわからないですよ。前々からきっちり準備している場合だと、役者の側が責任を持って請け負っている感じがしますが、急遽呼び集めたような場合もあったようですし、そうした事情までこうした日記の記述からでは読み切れないですね。

武井：九右衛門が出てくるとこういう人たちが出てくるというような傾向はあって、血筋を中心とした芸能プロダクションみたいなものだったのではないかと思います。一つのプロダクションで請け負えるものは請け負うけれども、人数が足りなかったりしたら、よそのプロダクションにも声を掛けるようなことがあったのではないでしょう。

林：集団としての動きと個人としての動きの境目ははっきりしないみたいですよ。

武井：いろいろあったでしょうね。

林：役者は基本的には芝居に出る場合は契約しますよね。元禄時代だと浪人役者とかがまだ問題になっていた時期で、あぶれた役者は屋敷方専門になってきたりするみたいです。

武井：劇場との契約は一年ごとだけれども、役者を供給する母胎と

なるプロダクションみたいなどころとの関係は遊女なんかと一緒のようです。

林：血縁と弟子関係ですよね。だから親玉が動くとそれに連れて何人かも動きますね。

加賀：プロダクションというのはどういふのでしょうか。

武井：抱えですね。それを現代の感覚に例えるとプロダクションかなと思います。抱え主は役者であつたり、囃子方だったりします。

林：抱えというのは野郎法度の時に禁止されますよね。それまでは色子だから抱えてるんだけど、役者をやっている以外は親元に返せと言われます。それ以降は貞享ぐらいには芝居町に役者の家とか書いてあつたりしますが、そういう資料がなくなつてくると、関係が見えにくくなります。評判記にたまたまこの人はどういふ筋とか書いてあるとわかるぐらいです。

武井：むしろ師弟関係みたいになつてくるよね。

林：どのぐらいの縛りだったのでしょね。

武井：売春が表芸だったのが裏芸になつて、薄くなつて行つて、そういう中で抱えの関係も変質していくように思います。

渡辺：津軽家の芝居上演は多い方なんでしょうか。

林：そんなに多い方ではないと思います。一般に数ヶ月に一回は上演していたようです。紀州なんかだとかかなり頻繁にやっている時期もありますし、それに比べると特に多い方ではないですね。

渡辺：芝居をやっていた方が普通だったということは保科なんかでもやっていたのでしょうか。松浦とかは実にやりそうではありますね。

武井：酒井雅楽頭はやりますね。芝居嫌いみたいなお殿様であつても、他に理由があつて芝居をやらせる。芝居を上演する理由の一つは男色、一つは女性を喜ばせるため、一つは林さんの言ういろいろな儀式関係のイベント、そして、もう一つ今日渡辺先生が出されたのが親戚関係の結束ですね。

林：武井さんは三百諸侯の内、三分の二はやっているとおっしゃつてますよね。もつと少なく見られている方もあるみたいで、まだ本当に十藩ぐらいしか解明されていないので、統計化できるほどは資料が揃っていないんですね。

武井：資料が残っているのが少ない上に、公式の日記は芝居のことなどは排除しているかもしれないという可能性があります。そういう中でも藩政日記にはかなりの確率で芝居の記事が出て来るので、出て来ない方がどうしてだろうと考えないといけないかなと思います。

林：享保ぐらいまでは屋敷廻り専門の歌舞伎役者が活動していたら

しいということがわかってきていますが、それ以降は現在分かっている史料はもう信濃まで飛んでしまします。これは自分の家に劇場まで作るんだけどもやっているのは腰元です。「百化物」には芝居町の役者をいっぱい呼んでやっていると出てきているので、もしかしたら、芝居町専門の役者集団はなくなってしまうている可能性もあるのかなと思います。もう少し経つてくると、お狂言師が出て来ますよね。大奥に呼ばれていたら他の大名家にも呼ばれていただろうしと思うけれども、まだよくわからないです。

武井：そのへんがこれから問題になるところですね。どこかで役者を呼ぶことをやめて、自前で家臣や女中が芝居をやるようになってたのか、それとも半分は呼んでて半分は自前でということなのかとか。

渡辺：大和守が特殊だというわけではないのかな。

林：大和守はやっぱ特に好きだったのだと思います。いろいろ資料が出て来て、「大和守日記」の価値が相対的に下がるのかなと思っていた時期もあったのですが、やはり「大和守日記」でないとわからないことは非常に多いですね。ますますその価値がはっきりしたという印象を受けています。

武井：特殊なものが先に出了たという感じですね。

林：「大和守日記」はやはりマニアの記録で、本当に貴重なんですよ。津軽家の日記を見ると、藩にとっては芸能上演も行事と

して運営するものだったのだということがよくわかりますね。

鈴木：奥の女中が何人ぐらい見ていたのか、そういう人数は記録されないものでしょうか。

林：日記の性格によるでしょうか。表向きの行事だから奥に関して記述しないとかいうことがあったのかもしれませんが。

武井：でも料理を用意する側は、何人分必要なかは大事な問題だったろうから、人数の把握はしていたでしょうね。料理にも格があったわけだし。お客に何人ぐらいお供が付いて来るのかとかも。

渡辺：足りなかったら大変だ。

林：芸能上演といいますが、饗応が一番大事なのは料理ですよ。

加賀：仕出しが来ている場合もありますよね。

林：仕出しは役者の分だけではないかと思っています。

加賀：信政は家中への思いやりが細やかな気がしますね。